

漁場の拡大とそれに伴う漁船の大型化・漁法の能率化の流れには勝つことができなかったようである。漁業から手を引いたもののうち船主だったものは漁船を売却した金で燃糸業に転業する、漁夫だったものは金沢方面へ日雇いに出るなどしてそれぞれに新たな人生をスタートさせた。しかしそのなかにおいて、出稼ぎ先に移住して漁業を継続したものがいる

ことは記されてもよいであろう。羽幌で水産加工場を経営するもの、猿払でサケ漁の新たな漁法を発明したり、養殖場を始めたり、ホタテ資源の回復に取り組んだものなど様々である。出稼ぎ時代に培った勤勉さ、研究熱心さ、粘り強さなどは、出稼ぎが終焉してからも内灘から遠く離れた地で根を下ろし、今も各地の漁業に貢献している。



社会福祉法人やすらぎ福祉会  
昉 昭 三

## 内灘の変貌—内灘米軍試射場接收と河北潟の消失

### 「内灘」の変貌

東は漣を湛えた湖面とその潟淵の舟小屋とヨシキリなどの水鳥たちを育てていた葦を茂らせた河北潟に接し、遠くに秀麗白山を望み、西には松林とアカシヤ林に囲まれ白砂の風紋を造りだす砂丘とそれに続く渺渺たる日本海に続く集落、それが内灘の原風景であった。

しかしここ50年来、内灘は大きく変貌した。浅野川の堤防から内灘砂丘を遠望すると、立ち並ぶマンションと新築された住宅群が砂丘を埋め尽くし、遠くに白亜の10階建ての金沢医科大学とレインボーブリッジの二脚のアーチが続いている。そしてその住宅群の手前には雑草が繁った原っぱが続き、そこにはかつての河北潟と内灘の面影はない。

このような内灘の変貌の原因は、6つの集落を貫いて作られた湖岸の道路と砂丘を縦断して走る農業用道路の整備、金沢市のベッドタウンとしての砂丘

の住宅化とそれに伴う道路と人口の急増（2000年人口、9,125世帯、26,560人）、そして埋立てによる河北潟の消失等がそれなのである。

このような内灘の変貌は、戦後の日本の高度経済成長政策による日本全土の変貌と機を一にした面も強いものであろう。しかし内灘の歴史を紐解くと、河北潟の消失は必ずしも日本の高度経済成長政策だけではなく、むしろ直接的には1952年に起きた米軍の内灘試射場接收問題と強く関連しており、今日の変貌とそれは大きな関わりをもっているのである。

### 「河北潟を干拓したが大変な失敗やった」

内灘接收反対闘争50周年を記念する行事の一つとして、当時の運動に直接関係した内灘の方々の座談会が何回か開催された。その座談会の一つに、当時の「接收賛成派」と「接收反対派」のそれぞれの壮年幹部として立ち回ったA,B両氏の対談がある。この対談で司会者の最後の質問は「接收反対闘争を子供たちに伝えるとすると、どんなことを伝えますか？」であった。その回答はA氏：「接收の補償条件として河北潟を干拓したが、大変な失敗やったということを伝えたい。あの大切な自然を無くしたこと、潟の周辺の村々の沢山の人が潟での漁業—しじみ、鰻、鮎、あまさぎ、そめぐり漁等—で飯を食べていたのが出来なくなったことだ」

B氏：「私もそう思う。私は最初は内灘は土地がな  
いばかりに貧乏していると考えて接収に賛成して  
河北潟の埋め立てを言った。しかし今となってはこ  
の考えは間違っていたと思う。今内灘では百姓して  
も生活出来ないからだ。これは私達に『人、時、所』  
を考えて行動すべきことを教えていると思う」と。

当時村会議員をしており、接収賛成派の中心であ  
り、その後町助役を務めた西田勇氏も「河北潟干拓  
の誤算」を追想記として最近発表している。

### 河北潟の誕生とその漁業

考古学の研究によると、約5千年前の縄文前期の  
「縄文海進」では能登半島南部の海岸線は宇ノ気、  
津幡まで湾入（河北入江）していたという。しかし、  
縄文早期中頃になって日角、白尾周辺から次第に砂  
州が南西に延び、縄文中期になると小規模の砂山が  
連続して砂丘を形成した（古墳時代初頭）。これが  
内灘砂丘の誕生（古砂丘）であった。当時の気候の  
冷涼化に伴う海岸線の後退、そしてこの砂丘の成  
長により河北入江は「潟」となった。河北潟の誕生  
である（「内灘町史」）。

このようにして生まれた河北潟は周囲35.5キロメ  
ートル、面積23平方キロメートル、東西の幅は4  
キロメートル、南北では10キロメートル、周辺の  
河川の水を集めて潟となり、大野川で日本海に排水  
していた。

この河北潟は蚊爪、潟津、八田、津幡、宇ノ気、  
内灘の潟淵に面した36集落の住民の生活の糧とし  
ての潟漁業の漁場ともなってきた。1912年（大正  
1）では潟漁業を営む漁民は1,608人で、うち内灘  
の漁民は600人、約37%を占めていた。当時の主要  
な水揚げ魚は、うなぎ（32.9%）、ふな、しじみ貝、  
あまさぎ、しらうお、ごり、はね、ぼら（3.1%）  
の順となっている。その漁獲高は64,310円であり  
当時の内灘村の漁業収入の20%であった（その他  
の地先漁178,678円、出稼ぎ漁103,450円 1911

年）（「内灘町史」）。

このような小舟での潟の漁業—湖面一面をおおい  
尽くすあまさぎ漁のいさり火—などは、それはまた  
河北潟の重要な風物詩となっていた。

### 河北潟—その「埋立て」計画の歴史と経過

しかし一方、この潟を埋立て、干拓して水田を造  
りたいという願望も古くから存在した。その経過を  
みると次のようである（「内灘町史」）。

#### ・1780年代（天明年間）

向粟崎、大根布村、大野川沿いの潟淵の新開を  
申し出る、しかし潟周辺の村の反対で進展せず。

#### ・1849年（嘉永2）

銭屋五兵衛が河北潟の埋立てを加賀藩に願い出  
る。この事業は2,300町歩の造成で米4万8千石  
の造成を予定し、20年間の計画であった。

#### ・1870年（明治3）

向粟崎村より大野川川淵の新田開発願い（2年  
間で百石程度）がでる。河北潟は周辺の浅野川、  
金腐川、森下川、津幡川、能瀬川、宇ノ気川を容  
れ、その末流は大野川となって日本海に注いでい  
る。従って潟周辺の水田は絶えず水害と塩害に悩  
まされてきたのも事実である。潟周辺の「潟田」  
の改修と保全は周辺農民の悲願でもあった。この  
ような要望に従ってその後も徐々に向粟崎、大根  
布の地先の新開がおこなわれた。

#### ・1897年（明治30）

向粟崎・本保喜平代表の4千歩の埋立計画が申  
請される。この許可に対して周辺36集落の住民  
が自己保有の水田の被害を理由に「河北潟河口埋  
立許可取消」の運動を起こす。

#### ・1902年（明治35）

石川県議会で埋立て問題が審議される。それ  
によると黒津船地内で砂丘を掘り割り、日本海に通  
ずる水路をつくり、船便をよくするとともに、排  
水を図って潟沿岸に水田を造成するというもので

あった。しかしその運河に疑問ありとしてこの計画は中止される。

・ 1913年（大正2）

河北潟埋立ての研究会発足、潟の半分を埋め立てるという計画。しかし内灘、宇ノ気、七塚、英田の漁民は賛成したが、米作と潟漁業の収益の比較検討から反対する空気が強かったことも関連して中止される。

・ 1930年（昭和5）

河北潟干拓計画が再び県会に上程されたが、村内の対立で中止となる。しかし1932年には西荒屋地先の埋め立てが認可される。

・ 1932年（昭和7）

戦時下ともなり、飯米確保の意味もあって「時局匡救事業」として西荒屋区が埋め立て申請をする。宮坂、西荒屋、室地先で翌年事業実施（総工費1万8千円、面積1万8千850坪 5.9町歩）される。

・ 1938年（昭和13）

大根布、宮坂、地内、西荒屋、室の5漁業協同組合が「内灘村河北潟埋立組合」を設立、大根布から室までの地先75万坪の埋立計画を提出、しかし実現せず。

・ 1943年（昭和18）

国営農地開発営団、内灘地先87町歩の埋立計画、しかし着工されず。

以上のように、資料を紐解くと内灘の人々は約200年前から河北潟で漁をしながらも、農業経営を夢見て時々その埋立てを試みてきたことが覗える。

**試射場反対運動、ようやく実行された河北潟の干拓**

試射場問題当時の内灘村の戸数は1,084戸（人口約6,500人）、その86%の918戸が漁業で、専業農家はわずか3戸であった。この漁業は主として河北潟漁、地先近海漁、そして鯨・帆立・烏賊・鯛刺し

網漁などの出稼ぎ漁業であった。これらの漁民の大部分はわずかの水田や砂丘地の畑を耕作する第二種兼業農家でもあったが、主食は殆ど購入しなければならなかった（終戦直後でも自家保有米を生産する所帯は10数戸にすぎなかった）。

石川県の調査では当時の内灘村の1戸当りの年間収入は21万円（実質10万円）となっている。所得税賦課戸数は僅かに43戸であり、村全体の貧困さを示していた。逆に生活保護世帯は141戸（408人）で全世帯の13%に及んでいた。このように収入が少なく、しかも不安定な漁業収入にしか頼れなかった内灘の「おかか」達は、遠い昔から魚介類や乾物の戸別訪問式の小売販売を近郷で行い、「担ぎ売り」（内灘のイタダキ）といわれてきた。それによって主婦たちは日々の「日銭」を得て生活を支えてきたのであった。

このような事情の一端を、1907年8月27日の北国新聞は次のように報道している。「内灘村大根布北海道出稼漁民三年來引続いての鯨不漁にて非常の困窮に陥入り、出稼漁民八百余名の七分通り帰村の旅費に差つかえほとんどなすところを知らざる・・・」と。

このような状況は戦後も続き、特に試射場接收問題が起きた1950年代は近海漁業が全国的に不振となった時期であり、内灘も例外ではなかった。特にこの時期から北海道での鯨漁が不振続きで内灘の人々の生活を強く圧迫していた。

村人、特に「おかか」達はこのような生活の不安定な状況をなくするために農地を獲得し、せめて自家米だけでも安定的に獲得する方法—陸稲や水稲の栽培を一貫して根強く考え続けていたのである（1951年、水田5反以上作付農家は全戸数の5.3%「農業センサス」）。

一方、米軍の砂丘の接收はこのような要求—砂丘の農地開発—を踏みにじるものであり、「村百年の計」を無視するものとして全村一致の反対運動とな

り、特にその反対の急先鋒は「おかか」達であった。反対の根底には、このようなこれからのそれぞれの家庭や内灘村百年の生活設計にかかわる問題があったのである。

このような状況での「接收問題」、当然のこととして接收の受諾を決意した村当局は村民に「河北潟干拓の絶好のチャンス」と勧誘し、政府も「干拓」を餌に接收を強行してきたのである。この間の事情を「内灘郷土史」は次のように記載している。

「妥結の日」（1953年9月14日）—「・・・午後3時、総理官邸、協議懇談会開催、出席者は田中官房副長官、伊関局長、林屋、喜多等各代議士に中山村長、中村・宮本・重原等の村会議員」。その協議のメモー「・・・2、米軍は3年以内とし保安隊に移管する。・・・9、河北潟の埋立を促進されたい。益谷『来年度から着手します。緒方副総理に念を押ししてある』・・・伊関『他の基地との関係もあり、文章から除いてほしい、実行の確信あり、外へ洩れないよう特に注意を乞う』・・・」

この協議懇談会は、9月10日に「内灘村」として砂丘地接收妥結の条件として25項目の「要望事項」を政府に提出したが、政府としてのその要望についての村当局との具体的な内容についての協議の場であったのである。この協議で河北潟の干拓は「秘密事項」として了解されたことを示している。

そしてその後の経過は次のように展開したのであった（「内灘町史」）。

#### ・1953年

金沢農地事務局、900ヘクタールの国営河北潟干拓事業計画を発表。

#### ・1958年

向粟ヶ崎の高橋ら81名が食糧増産を名目として、潟淵20.2町歩の埋立申請をする。埋立地は大

根歩との境界から大野川右岸。

#### ・1960年

国営河北潟干拓事業開始（埋立水田造成事業—公有水面埋立法による申請）

#### ・1963年

事業完了。

この干拓事業により、町を二分するように河北潟放水路が堀り割られ（1968年）、河北潟全面積2,248ヘクタールのうち1,415ヘクタールが干拓され、残り833ヘクタールが調整池として残された。この干拓事業では漁民の潟漁業権の放棄が必要であったが、真っ先にその放棄を宣言したのは内灘の漁民であった。漁業権を放棄した漁民に政府は補償金を支払った。3億2,939万3,573円、うち内灘の漁民には1億5,562万円、47%が支払われた。

このようにして河北潟は干拓されて、流域河川の排水路のみの水路となって消失していったのである。内灘の人々の執拗な悲願、200年来の願望が達成されたのは何と試射場問題の「妥結の日」の総理官邸での「密約」によってであった。

#### 待望の「農地」が生まれたが！

干拓事業は1963年に着工され、1971年に完成して、河北潟は1,356ヘクタールの農地として干陸された（内、農地は1,071ヘクタール。工事は沿岸既耕地の排水改良も含む）。費用は282億円の巨額なものであった。

造成された干拓地は周辺の市町村に地積配分されたが、内灘町のそれは484ヘクタールであった。内灘村民の永年の悲願であった米作りの基盤の「農地」が河北潟から生まれたのである。その農地の配分を求めて、ほとんどの町民が希望面積を申し出た。それは内灘町の配分地積の約3倍にも達した。

しかし、1970年代から外米の輸入と米の過剰生産という理由で、国は農家の米作の「減反」政策をとり始めた。この政策変更によって、河北潟干拓計

画の当初の水田造成による稲作計画も1971年に計画変更され、水稲作は許可されなくなった（内灘町史）。多くの町民は干拓地の獲得計画を放棄した。そして「内灘町からは干拓地への入植者はなかったが、増反では蔬菜、野菜栽培を143戸、養鶏、養豚を9戸、果樹栽培を6戸の希望があった。昭和56年には内灘町外から10戸の酪農希望者が入植した」（内灘町史）。

2003年現在では、干拓地の内灘地積の個人所有者は56人、そのうち内灘町民は36人となっている。その殆どの農地は大豆、麦、スイカ等の栽培であり、「水田」稲作は皆無であるという。（他町村では、既存の水田を休耕田にして、その分を干拓地の一部を一時的な「水田」として利用しているものもある）。最近の統計では、干拓地からの収入は酪農関係で約11億6千万円、農産物で約8千8百万円であるという。

更に、200年来営々として潟沿岸の埋立てで造成してきた水田（背後地）も、埋立水田のため大型農機具の導入も困難となり、結局苦勞して永年かけて造成した潟淵の水田も今日では休耕田となっている。1980年当時の水田面積（背後地）、兼業農家は12,243アール、650戸あったが、2000年のそれは4,809アール、258戸と激減しているのも、このような事情を反映したものであろう（この要因に市街

化区域等への農地転用もあるが）。

このような河北潟の干拓による新開地の推移をみると、200年来の悲願であり、接取反対運動で大騒動して「勝ち取った」河北潟の干拓の計画は、せめて自分たちの食べる米ぐらいは自家生産したいという内灘の「おかか」にとってはまったく無縁の事業として実行され完成したこととなる。そしてそこに残ったものは833ヘクタールの「調整池」であった。1985年、内灘町議会で「河北潟水質汚染対策の早期確立に関する意見書」が採択された。これはこの「調整池」の水質の汚濁度が国の環境基準の2倍となっているというのである。汚濁の原因は周辺からの雑排水の流入、特に周辺地域の人口増加等による生活排水の流入が原因と考えられ、更に海水の逆流を防ぐ金沢港防潮堤と干拓で新設された放水路の防潮水門の建設が「調整池」の閉鎖性を高め、池水の淡水化を決定づけ、植物性プランクトンの異常繁殖をもたらしたことが原因であるという。

舟小屋が並び、その潟淵にヨシキリなどの水鳥たちを育む葦を茂らせ、湖面に漁り火の風物を湛えた河北潟は消えて、死んだ「調整池」を残してしまったのである。何を「地域」の中で守り育て、何処をどのように開発してゆくか？消えた河北潟は私達に問い質しているようである。



河北潟はその2/3が農地造成を目的に干拓された